第23講　現代思想

1　精神分析学

ヘーゲルのドイツ観念論，ベンサムやミルの功利主義，マルクスやエンゲルスの社会主義など，近代社会を発展させてきた思想の背景には，**理性**への信頼があった。人間は，理性で意識できる範囲で自らを律すれば，行動を完全にコントロールできるという考えである。しかし，「理性の下には**無意識**があり，思考・感情・行動を支配している」と考え，そのメカニズムを解明しようとする学問が，19世紀末に登場した。それが**精神分析学**である。

①フロイト（1856～1939年）

A　人物

チェコ生まれの**オーストリア**の**精神分析学者**。ユダヤ人の厳格な父の下で育てられる。ウィーン大学の医学部で生理学・進化論・神経病理学などを学び，フランスにも留学。1938年，ナチス＝ドイツがウィーンを占領したためイギリスに亡命し，翌年に死去。主著『**精神分析学入門**』『**夢判断**』。

B　**無意識**の発見

フロイトは，**神経症〔ノイローゼ〕の治療**や**夢の研究**の中で，近代文明の発展を支えてきた人間の理性の奥底に，意識的に統御（とうぎょ）できない**無意識**の存在を発見し，その働きに注目した。

C　心の３つの層

1　**エス〔イド〕**

無意識に**性衝動〔リビドー〕**が蓄えられた部分で，**快楽原則に支配される。**

2　**自我〔エゴ〕**

意識の部分で，エス〔イド〕の要求（＝快感を求める）を現実に適応させ，同時に超自我〔スーパーエゴ〕の命令にも応じようとする。

3　**超自我〔スーパーエゴ〕**

人間の根源にある**欲望を統御する良心**で，教育を通じて社会規範が内面化されたもの。

※これの働きが自我〔エゴ〕を統御し，エス〔イド〕を抑圧する。

D　子どもの無意識の抑圧（よくあつ）心理

1　男児の父に対する**エディプス〔オイディプス〕コンプレックス**

2　女児の母に対する**エレクトラコンプレックス**

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

②ユング（1875 ～ 1961 年）

A　人物

スイス生まれの精神分析学者。ドイツ国境近くで牧師の家庭に育つ。バーゼル大学で医学を学び，パリに留学した後，チューリヒ大学を出てバーゼル大学の教授を務めた。

フロイトの共同研究者として32年間の交流をもつが，のち独自の路線で**分析心理学**を打ち立てた。主著『心理学と錬金術』。

※あらゆるものを性衝動〔リビドー〕に結び付けようとするフロイトに対し，ユングは考え方の違いを感じ，最終的に決別した。

B　性格類型

心的エネルギーである性衝動〔リビドー〕が，外界と内面のどちらに向かいやすいかによって，**外向型・内向型**の２つに分類した。

※さらに，思考・感情・感覚・直観のどれが優先するかに区分し，両者を掛け合わせ８通りに分類した。

C　**無意識**の区別

ユングは，人間の心には無意識の領域がある，という点においてはフロイトに同調したが，**個人的無意識**と**集合的無意識〔普遍的無意識〕**とを区別した。

D　**元型〔アーキタイプス〕**

集合的無意識は，個人的無意識より深い層にあり，そこには人類に共通する普遍的イメージや観念の世界が広がっているとし，それを**元型〔アーキタイプス〕**と名付けた。

※元型の中身は，世界中に広がる神話・伝説・昔話などに共通して見いだせる（例：鬼や悪魔，グレート＝マザー）と考えた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

２　フランクフルト学派

フランクフルト学派は，第二次世界大戦（1939～45年）の直前，1930年代に現れた思想家集団で，**ドイツ**のフランクフルト社会研究所を中心に，**実存主義とは別の視点から近代的理性を批判**した（＝**批判理論**）。彼らは，なぜ「理性」が発達したはずの社会に，ムッソリーニのファシズムやヒトラーのナチズムのような**「野蛮」**が発生したのか，という問題意識をもっていた。

※フランクフルト学派の立場では，近代的「理性」は，その啓蒙活動によって，人類に「自由と解放」ではなく「支配と管理」をもたらし，「野蛮」に転落させた悪因であった。

※メンバーの多くがユダヤ系であり，現代社会が人間を秘かに支配するシステムと化していることに批判的で，マルクス主義とも関わりが深かったため，ヒトラーが台頭した時期は，ユダヤ人迫害を逃れてアメリカに亡命し，活動した。

①ホルクハイマーとアドルノ

A　主張

ホルクハイマー（1895～1973年）と**アドルノ**（1903～69年）は，共著『**啓蒙の弁証法**』で，「理性」は自然を支配することで文明を進歩させる一方，その進歩は管理社会をつくり上げ，人間を抑圧する「野蛮」へ陥（おちい）らせる，とした。

B　**啓蒙の弁証法**

啓蒙主義的な人間の姿（＝理性）は野蛮な在り方と対立するが，両者は止揚（しよう）〔アウフヘーベン〕して高みに上ることはなく，転落する（＝**否定的弁証法〔逆向きの弁証法〕**）。

※近代以降の社会を振り返ると，文明の進歩は，人類を人間らしい状態でなく，むしろ野蛮状態へ導いたと言わざるを得ず，進歩は退歩に逆転したと考えた。

C　**道具的理性**

近代の科学技術の進歩や産業社会の進展に伴って，「理性」は目的に対する効率的手段を判断･計算するだけの画一的な道具になってしまった，と考えた。

※自然を支配する道具と化してしまった「理性」は，人間本来の自由をかえって失わせた，とした。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

D　**権威主義的パーソナリティ**

アドルノは，ファシズムの解明をテーマとした『**権威主義的パーソナリティ**』を著し，権威に弱く硬直した性格の人は，人種・宗教などに基づく偏見をもちやすく，人間を上下関係の中に序列づけて考える（＝差別意識をもつ）傾向があるとした。

②フロムとマルクーゼ

A　**フロム**（1900 ～ 80 年）

フランクフルト学派に精神分析学を導入して，のち新フロイト派に連なった社会心理学者。著書『**自由からの逃走**』で，現代人は社会の束縛から解放され自由な個人となったが，それゆえに耐えがたい孤独に陥り，強力な指導者に隷属したり，全体主義的な社会に浸りきったりすることにより，自由から逃れ楽になろうとする傾向をもつ，と述べた。

※近代以降，人間は「理性」を駆使して自由を獲得してきたはずだが，その自由が時に耐えがたいほどの重荷になることもある。人間はその重荷から逃れようとして，結果的にファシズムの台頭を許してしまうことがある，と説いた。

B　**マルクーゼ**（1898 ～ 1979 年）

管理社会の中で批判的な理性を喪失し，現状を肯定するだけの人間を「**一元的人間**」と名付け，本来の人間的自由を阻害する現代社会を厳しく批判した。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③ハーバーマス→フランクフルト学派「第２世代」

フランクフルト学派「第１世代」は，ファシズムに陥った**「原因」**を考えたが，**「第２世代」**の**ハーバーマス**（1929年～）は，主著『コミュニケーションの理論』などで，ファシズムの**「防止方法」**を提示した。彼は，多様化が進む戦後社会では，**討論**を通じて強制を伴うことなく**合意**をつくり出すことができる，と論じ，人と人との対等で自由なコミュニケーション行為において働く**対話的理性〔コミュニケーション的理性〕**に目を向けた。

※ハーバーマスは，人は互いに合意に至ることを可能にするような「理性」（＝対話的理性）をもっているとし，道具的理性を排除した新たな社会システムの実現を模索・検討した。主著『公共性の構造転換』『コミュニケーション的行為の理論』。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

３　分析哲学

①当初の思想→哲学は無意味

オーストリアに生まれ，**イギリス**で活躍した**ウィトゲンシュタイン**（1889 ～ 1951 年）は，当初『論理哲学論考』を著して**「語りえぬものについては，沈黙せねばならない」**という立場をとっていた。

※自然科学・社会科学においては，命題の真偽（しんぎ）を確定できるが，**神や道徳などに関する宗教や哲学の言語は，現実の事象との対応関係がない**（＝人文科学）。つまり，これまでの哲学的問題の多くは「語り得ぬものを語ろうとした」ために生じたとし，**近代哲学など無意味である**，と考えた。

②その後の思想→言語ゲームと分析哲学

その後，ウィトゲンシュタインは，日常生活における言語の使用や規則の習得について分析し，**「言語ゲーム」**という概念を導入し言語の問題を捉え直した。言葉には，どれも固有の意味があるのではなく，何らかの規則に従い使われる中で，特定の意味・働きをもつのであり，使用者はそのルールを自覚しているわけではない。それは，ある人がトランプでゲームをしている人々の輪に入って，そのゲーム特有のジョーカー札の使い方を覚えることに似ている。つまり，日常言語は，互いにゆるく繋がりながら，互いを位置付けているだけだ，とした。そして，自然科学・社会科学における言語の使用もまた，多様な言語ゲームの一つであるにすぎないと考えた。

※このように，言語使用のあり方そのものの仕組みを問う学問を**分析哲学**といい，大きな思想的潮流となった。

③ウィトゲンシュタインの思想の意義

従来，形而上学的なレベルで議論されてきた哲学のテーマを日常生活（＝形而下）に引きずり下ろし，**真の命題を，抽象的な「世界」ではなく，現実世界で考え直そうとした。**主著**『論理哲学論考』『哲学探究』**。

４　構造主義

①構造主義とは？

フランクフルト学派(独)やウィトゲンシュタイン(英)の分析哲学とともに,「理性」を絶対視してきた近代哲学を破壊するような思想に，**フランス**で登場した**構造主義**がある。構造主義では，部族社会（＝象徴的）であれ，文明社会（＝科学的）であれ，**人間や各個人が何をどう思考しようとも，社会制度や文化の背後には，一貫した無意識の規則である「構造〔システム〕」がある**，と捉える。

※人間社会には「進歩」などというものは存在せず，同じ構造の下で**「変換」**するだけだ，とした。

※**スイス**の言語学者**ソシュール**の構造言語学が，構造主義のモデルとなった。

②レヴィ＝ストロース→文化相対主義

Ａ　主張

フランスの文化人類学者**レヴィ＝ストロース**（1908 ～ 2009 年）は，非西洋のいわゆる“未開社会”に暮らす人々の実地調査を行い,彼らのもつ「野生の思考」の内に，自然と文化を調和させる可能性を見いだした。

※未開民族の儀礼中心の生活は,西洋近代文明から見れば野蛮に感じるが,そこには文明人の科学的思考に少しも劣ることのない複雑な規則に基づいた一定の「構造」があることを明らかにした。

Ｂ　**諸文化は対等の価値をもつ**

「文明社会こそ優秀（＝進歩），未開社会は野蛮（＝停滞）」と文化に優劣をつけ，前者が後者を支配し克服すべき，等と考えることは，**自文化中心主義〔エスノセントリズム〕**に基づく誤りであるとした。

※西洋近代文明における,「理性と科学技術に基づく社会」が頂点に位置するわけではないことを指摘し，文明社会に住む人々に根底的反省を迫る態度をとった。主著**『野生の思考』『悲しき熱帯』**『親族の基本的構造』。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③フーコー→文化相対主義

A　主張

フランスの哲学者**フーコー**（1926～84年）は，近代以降の西洋文明社会では,「理性」を基準に,無意識的に近代的秩序から逸脱するものを**「狂気」**とみなし，異常なものとして排除してきたとした。

※この**排除の論理**によって，本来，多様なあり方をもつはずの人間や文化は，西洋近代の価値観を基準に序列化されてきた。そして，その位置づけに根拠はないのに，序列化により社会の監視･管理が強まったとして，**近代の成立過程を批判**した。

B　「理性」の絶対視を批判

近代以降，人間が「理性」を絶対視し，自らの内にある非理性的なものを支配･抑圧できる人こそ正常かつ健全である，とみなす傾向を問題視した。それは，その時代特有の「真理」イメージに基づく一つの考え方にすぎないのに，多くの人間はそこに気付かない。その結果，自らの内にある正常でないものを自ら進んで否定し，社会への服従を自覚なく選択することになる。

※近代では，理性的なものと非理性的なものを選別し，後者を排除する権力行使が当たり前になることで，監視に怯(おび)え管理を許し，社会規律に進んで従う人間が生み出されてきた（＝人間が規格化されてきた）。フーコーによれば，実存主義のサルトルが言うような「自由な意志に基づく主体的な生き方」も，近代社会の枠組みの中で刷り込まれた選択肢でしかない。それは与えられた理想であり，そこに向かい生きることは，結局「自発的な服従」にすぎないと批判した。

C　**「知の考古学」**を提唱

フーコーは，西洋の歴史を客観的に分析し，確固とした「理性」や「真理」という考えは，絶対的でも何でもなく歴史的産物にすぎない，ということを明らかにした。主著**『言葉と物』『狂気の歴史』『監獄の誕生』**『性の歴史』。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

５　その他の現代思想

①レヴィナスの倫理的主体

A　主張

リトアニア生まれのユダヤ人で，ナチス＝ドイツのホロコースト〔大量虐殺（ぎゃくさつ）〕により家族を失い**フランス**に帰化した哲学者**レヴィナス**（1906～95年）は，自己意識の中に取り込めない**他者**が現れる場を**「顔」**という言葉で表現した。

※そして，近代的理性が「他者をどう役立てるか」という発想でしか物事を評価してこなかった暴力性を照らし出した。

B　**「汝（なんじ）殺すなかれ」**

レヴィナスの著書**『全体性と無限』**によれば，他者性をもつ「顔」が自己に迫る「汝殺すなかれ」という倫理的命令の呼びかけは，世界を道具とみなすことを止め，他者にも苦痛が存在することを自覚し，その苦痛に自己が責任をもつ態度である。

※逆に，自己に役立たないものを排除するとは，世界を自己に同化させる営みに他ならない。それは，他者のいない世界を生きようとすることであり，ならば，人間に個として存在する意味はない。

※それを他者の苦痛を克服することで覆したときに，初めて人間は存在の無意味さを克服し，**倫理的主体**になる，とした。

②ハンナ＝アーレントの公共性と全体主義

ドイツ生まれのユダヤ人で，**アメリカ**に亡命した政治学者**ハンナ＝アーレント**（1906～75年）は，ヒトラーのナチス＝ドイツやスターリンのソ連を典型とする**全体主義**が生まれるメカニズムを解明しようとした。彼女は，人間の行動を**労働**（＝生命維持のため食糧を得る行為）・**仕事**（＝自然を加工し物をつくり，文化的世界を形成する行為）・**活動**（＝私的利害の束縛から解放され公的な政治空間で自由に話し合い，言葉で相手を動かし**公共性**の領域**〔公共的空間〕**をつくる行為）の３つに分けた。

※しかし，現代社会では，私的領域と公的領域が混同され，政治から公共性が失われていく，とした。その結果，人間の個性が見失われ，孤立して無力感にとらわれた大衆が帰属感を求めて全体主義に陥ってしまう，とした。主著**『全体主義の起源』『人間の条件』**。

※実存主義のハイデッガーと過去に恋愛関係であったハンナ＝アーレントは，ナチスを擁護した彼を，戦後に責めることはしなかった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③ボーヴォワールのジェンダー論

A　主張

フランスの文学者・**実存主義者**である**ボーヴォワール**（1908 ～ 86 年）は，パリ大学でサルトルと出逢い，生涯連れ添ったが，「互いの自由恋愛には干渉しない」とした契約結婚関係であった。彼女は女性の自立を追及し，生物学的性差〔セックス〕と**社会・文化的性差〔ジェンダー〕を明確に区別**した。

B　**「人は女に生まれるのではない。女になるのだ」―『第二の性』より―**

ボーヴォワールは，人間集団にあっては何事も意味付けがなされているため自然のままではあり得ず，とりわけ「女性」は文明がつくり上げた「（通常の性＝男性から逸脱した）もう一つの性」であると論じた。

※つまり，最初から女の運命には「女性らしさ」という他人が求める暗黙の意図が介在している。この，暗に求められる「女性らしさ」の内容が異なっていたら，「女性」の運命は全く別の結果になっていただろう，と考えた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④ロールズの正義論→リベラリズム〔自由主義〕の代表

A　主張

アメリカのハーバード大学の政治哲学者**ロールズ**（1921 ～ 2002 年）は，著書『**正義論**』の中で，自由や富などの「各人それぞれが望む生を実現するために必要な基本財」を分配する正義の原理を，社会契約説の理論に基づき探究した。

B　正義の二原理→**「公正としての正義」**を実現するために

１　人はみな自由で，平等な権利をもつが，他者の権利を侵害してはならない。

２ａ　社会の格差は，平等な機会の下での公正な競争の結果でなければならない。

ｂ　社会の格差は，（競争の結果生まれた）最も恵まれない人々の生活改善につながる限りで認められる。

C　**功利主義を批判**

ロールズは，「個人の快楽を求める行動がそのまま社会全体の幸福につながる」とする功利主義を批判，「社会とは人々の（暗黙の）合意に基づき成り立つべきである」とする社会契約説の復権を唱えた。

D　マイケル＝サンデル（米）による批判→コミュニタリアリズム〔共同体主義〕の代表

１　善の追求という目的を書き，個人的権利の保障を優先する無目的な正義論。

※社会はまとまりを欠き，政府も方向性を打ち出せず，政治が行き詰まる。

２　ロールズの人間観にコミュニティへの属性がない。

※所属するコミュニティを考慮しない議論は現実と乖離（かいり）する。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

⑤センの潜在的アプローチ

A　主張

インド生まれでイギリスで活動した**アマーティア＝セン**（1933年〜）は，開発と**貧困**の問題などを専門とする厚生経済学者。「自分にとって価値があると思う諸目的」を追求する自由（＝**潜在能力〔ケイパビリティ〕**）を等しく保障することが重要である，と指摘した。

※格差の是正には，生きる環境や能力が異なる人々に対し，同じ財を分配するのではなく，基本的な潜在能力の平等を保障することが必要だと考えた。

B　**潜在能力アプローチ〔ケイパビリティ＝アプローチ〕**

センは，人間は多様な存在であるので，ロールズ（米）の唱える分配の正義ではなく，**潜在能力の機能がどれほど発揮できているか**，で格差是正を評価しようとした。

※貧困などの格差問題は，単に所得を向上させることで解決できるわけではない，と考えた。

※ 1998年，アジア人として初めてノーベル経済学賞を受賞した。

⑥デリダの脱構築

フランスの哲学者**デリダ**（1930〜2004年）は，西洋哲学が基礎としてきた言葉〔ロゴス〕中心主義や，デカルト（仏）に代表される物心二元論的思考など，階層化された思考を解体し，新たな価値世界を歴史の中で再構築するため**「脱構築」**を主張した。これは，「絶対的な真理を確立するために，今ある真理を否定する」という思考活動を同時に行う哲学的立場である。

※デリダは代表的な**ポスト構造主義**〔脱構造主義〕の思想家。他にも，同じフランスの**ドゥルーズ**や**ガタリ**などが有名。

⑦サイードのオリエンタリズム

パレスチナ人〔アラブ人〕としてエルサレムに生まれた**アメリカ**の思想家**サイード**（1935〜2003年）は，著書『**オリエンタリズム**』の中で，近代の西洋社会が自らを東洋と区別し，東洋を非合理的・後進的とみなすことでアイデンティティを形成した過程を指摘し，それを**オリエンタリズム**と呼んだ。そして，これが西洋による植民地支配を正当化してきた，と批判した。

※植民地の独立後も続く，支配の歴史によって形成された抑圧や偏見を批判する，ポストコロニアリズムの理論を唱えた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第23講　倫理確認テスト

1　フロイトのいう，人間の根源にある欲望を統御する良心を何というか？

①　エス〔イド〕　②　自我〔エゴ〕

③　超自我〔スーパーエゴ〕　④　性衝動〔リビドー〕

2　ユングのいう，人類に共通する普遍的なイメージや観念の世界を何というか？

①　元型〔アーキタイプス〕　②　個人的無意識

③　エディプスコンプレックス　④　エレクトラコンプレックス

3　フランクフルト学派「第１世代」である，ホルクハイマーとアドルノの共著とは？

①　『夢判断』　②　『啓蒙の弁証法』

③　『権威主義的パーソナリティ』　④　『自由からの逃走』

4　フランクフルト学派「第１世代」のマルクーゼは，管理された社会の中で批判的な理性を喪失し，単に現状を肯定するだけの人間を何と名付けたか？

①　「マージナル＝マン〔境界人・周辺人〕」　②　「ダス＝マン〔ひと・世人〕」

③　「死への存在」　④　「一元的人間」

5　「言語ゲーム」という概念を導入し，分析哲学を創始したイギリスの哲学者とは？

①　ベーコン　②　ベンサム　③　ミル　④　ウィトゲンシュタイン

6　『野生の思考』『悲しき熱帯』を著した，構造主義の祖とは？

①　レヴィ＝ストロース　②　フーコー　③　ドゥールズ　④　ガタリ

7　レヴィナスは，自己意識の中に取り込めない他者〔他性〕が現れる場を何という言葉で表現したか？

①　「顔」　②　「ジェンダー」　③　「狂気」　④　「対話的理性」

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

8　ハンナ＝アーレントの著書を一つ選べ。

①　『精神分析入門』　②　『コミュニケーション行為の理論』

③　『第二の性』　④　『全体主義の起源』

9　ハーバード大学で「公正としての正義」について講義した政治哲学者とは？

①　ロールズ　②　サンデル

③　アマーティア＝セン　④　ボーヴォワール

10　『オリエンタリズム』を著し，西洋による植民地支配の正当化を批判したアメリカの思想家とは？

①　ハーバーマス　②　デリダ　③　サイード　④　パース

解答

1	③	2	①	3	②	4	④	5	④
6	①	7	①	8	④	9	①	10	③

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。